

# 北尾次郎『おろかなミヒェル』について

西 脇 宏

## I 「幻の雑誌」と北尾次郎

存在そのものは広く知られていながら、杳としてその現物の断片すら発見されず、永らく幻の雑誌とされてきた<sup>1)</sup> »Von West nach Ost« (『独逸文雑誌一名東漸新誌』)の一部が、ついに国立国会図書館の所蔵するところとなった。寡聞にして所蔵に至る経緯については詳らかにしないが、受付印の日付は平成4年4月27日となっている。今回収蔵されたのは、1889(明治22)年発行の第1巻第1号(I. Jahrgang Nr. 1)から同巻3号(Nr. 3)までの計3号、月刊誌であった同誌の3ヶ月分のみである。今後さらなる発見の可能性も残されてはよいが、現時点でも、森鷗外幻のドイツ語論文、»Über eine neue Richtung der japanischen Litteratur« [sic.] (「日本文学の新しい傾向について」)の全文発見といった、書誌学上の空白を埋める大きな新発見があった。<sup>2)</sup>

鷗外、藤山治一、寺田勇吉とともに、4名だけの「活動会員」(Die activen Mitglieder [sic.])に名を連ねている北尾次郎<sup>3)</sup>の同誌への積極的にかかわりも、同時にまた明らかとなった。まず、毎号の表紙を麗々しく飾っているイラストは次郎が描いたものである。ギリシア風女性像を左右に、旭日を光背に持つ紋章的図像を中央に配した構図は、一見して紛れもなくグレコフィル次郎のものであるが、左右の下部にあるK del.の署名がそのことをはっきり証明している。K del.とは、Diro Kitao delineavit、すなわち、「北尾次郎画之」の意だからである。さらに、無署名、匿名の部分のをぞいても、次郎は論文 »Über die Spectralanalyse« [sic.] (「スペクトル分析について」)を1、2号に連載している。

ところが、鷗外の上記論文が巻頭に掲載された第3号の目次には、次郎の名前はなく、目次からだけでは次郎の「活動」状況は不明なままである。参考までに、第3号の目次を訳出する。右端の数字は第1号からの通算のペー

ジを表している。

日本文学の新しい傾向について (博士 森 林太郎)	2 3
おろかなミヒェル (アナタール・シュームリヒ)	2 5
フランツ・フォン・シーボルト (藤山治一) [完]	3 1
日本人の住宅についての民族学的=衛生的研究 (博士 森 林太郎) [連載第3回]	3 3
インマーマンの『大農園』 [連載第2回]	3 6
ヒャリートの歌 (匿名) <sup>4)</sup>	3 8
東西笑い話	3 8
独逸文雑誌会 全会員一覧 お知らせ	

鷗外の両論文の倍近い6ページにわたって掲載され、紙数の上で第3号の中心となっているのは、『おろかなミヒェル』(»Der dumme Michel«)である。しかしながら、今回その内容を検討したところ、これは北尾次郎が1900(明治33)年から翌年にかけて»Zeitschrift für Deutsche Sprache«(『独逸語学雑誌』)に連載した同名のメルヒェン前半部分と、ほぼ同じものであることが判明した。(第3号掲載分は「つづく」で終わっているの、後半部分は第4号に掲載されたものと思われる。)

作者シュームリヒの名は、巻末の「全会員一覧」の「正会員」「活動会員」「準会員」いずれの欄にも記載がなく、次郎の筆名であろう。シュームリヒは形容詞schummerig, schummrig(薄暗い、どんよりした)から採られたものと思われ、実作者を韜晦する仮名としては理想的考案である。1、2号に純然たる学術論文を發表していることから推察するに、次郎にとって»Von West nach Ost«へのかかわりは、この時点ではまだ公的活動の一環と認識されていたのであろう。そのため実名で文学作品を公表することに憚りがあったのだと思われる。

»Von West nach Ost«に發表された『おろかなミヒェル』(以下VWnO版と略)と»Zeitschrift für Deutsche Sprache«に連載された『おろかなミヒェル』(以下ZfDS版と略)との同一性は、ことさらな論証を要しない自明のことであり、また次郎が他人の作品を剽窃したとも考えられないので、

以下においては両者いずれもが次郎の作品であるとの前提のもとに考察を進める。

作家北尾次郎の活動が、結局は一般に知られることなく終わった主な理由としては、1. もっぱらドイツ語でのみ創作したこと、2. 次郎にとって文学はあくまでも Zeitvertreib、個人的趣味であって、発表された作品が少ないこと、等が考えられる。『おろかなミヒェル』同様、「Von West nach Ost」の第1巻第9号に掲載されたという『小説吾妻』<sup>5)</sup>が未発掘の現在、生前に活字化された数少ない作品の中で、形式、内容両面の完結度という点で、『おろかなミヒェル』に匹敵するものは存在しない。<sup>6)</sup>

知られざる人北尾次郎の、さらに知られざる作家としての側面を、広く江湖に知らしめたいというのが筆者長年の願いであるが、「Von West nach Ost」発見を機に『おろかなミヒェル』を取り上げることで、その宿願の一端を果たしたい。発表された雑誌の特殊性、ドイツ語を解さない読者の便宜等を勘案して、今回はとりあえず、まず ZfDS 版『おろかなミヒェル』の梗概を紹介し、次に VWnO 版と ZfDS 版との異同について述べるにとどめる。作品としての具体的な評価検討は他日に譲りたい。

## II ZfDS 版『おろかなミヒェル』

ZfDS 版『おろかなミヒェル』は、「Zeitschrift für Deutsche Sprache」(『独逸語学雑誌』)第3巻第1号(1900年9月)より第4巻第4号(1901年12月)まで、途中3回の休載(第3巻第2号、第7号、第12号)をはさんで、都合13回にわたって連載された。一回あたりの掲載分量は、ばらつきはあるものの、平均すると縦2段組の同誌の3段分、約1.5ページである。VWnO 版と比べると誤植が多だけでなく、おそらくは編集者の手を経ることなく原稿のまま印刷されたからであろう、次郎の正書法、句読点法上の問題点<sup>7)</sup>が解決されないまま活字化されており、読解に若干の困難が伴う。

物語はメルヒェンに常套的な書き出して始まる。

昔々ミヒェルという名の農夫の若者がおりました。みなさんはもう笑っていますね。だってミヒェルという名前ですでにおろかな農夫の若者と

いった響きがありますから。たしかにその若者はおろか者で、しかも実際ミヒェルという名前だったのです。

母親が反対したにもかかわらず、家に代々伝わる男の子の名前ということで父親がミヒェルと名付けたこの少年は、おろか者だというのが村人の一致した評判で、自分から口をきくこともほとんどなく、同輩のように外で遊ぶでもなく、いつも母親のそばに座っているのだった。ミヒェルには、愛したり、憎んだり、希望を抱いたり、恐れたりする魂が欠けており、少年となっても一向に知恵が付かない。「ミヒェルがおろかなのは名前のせいだ」と失望した母親は父親と口論となるが、「洗礼の時に代母が逆さまにしたせいだ」と父親は激怒し、離縁の脅しで母親を黙らせてしまう。

村人はミヒェルのことを「魂なし」(seelenlos)ミヒェルとからかうが、本人はいたって平気で、ついには父親も、我が子が魂を持たずに生まれてきたことを認めざるを得なくなる。

やがて父親の畑仕事を手伝えるまでにミヒェルは大きくなるが、血肉を備えた機械のように、正確に命じられた通りにしか働かない。村人全員にとって魂を持たないおろか者でしかないミヒェルは、一個の道具とみなされ、村人との心の交流は求めもしないし、与えられもしない。相前後して両親と死別し、とうとう「ひとりぼっち」(mutterseelenallein)となったミヒェルはついに一言も口をきかなくなってしまう。

両親の埋葬時にも泣かなかったミヒェルは、日暮れになると荒れ野へ出て、夜中まで宵闇を見つめ、家屋敷は荒れるに任せる。このままでは将来村のお荷物になると心配した村長は、ミヒェルを下僕として雇う。ミヒェルは黙々と勤勉に仕事をするが、村人はますますもって首を傾げる。「ミヒェルはおろかなだけじゃなく、頭の病気に違いない。」

自分たちは魂を持って生まれてきたと思っている無知蒙昧な村人は、魂を持たずに生まれてきた者が決して魂を手に入れることはないと思っており、生後魂を手に入れようとする人が、いちばん美しい最良の魂を手に入れることができるということを知らない。だから魂のことで、ミヒェルをさんざんからかっていた。厳しく冷え込んだ冬の夜、あまりのおろかさにその寒さも感じないミヒェルは、いつものように荒れ野ですわって、「小さな魂が、ちっちゃな魂があればなあ」とつぶやく。

すると突然悲しげに語りかける声が出て、ミヒェルが振り向くと、凍えるように寒い刈り入れの済んだ畑の上に、美しい白いまぼろしの姿が現れる。ミヒェルがだんだんと口数が少なくなったのは、幼い頃夢の中でよく一緒に遊んだ綺麗な女の人が、もうずっと夢に出てこなくなったから。その女性がいま目の前に立っている。「また出てきてくれたんだ。一緒に積み木遊びをしよう。」(第3巻第1号)<sup>8)</sup>

自分の姿がミヒェルに見えることに驚き、その女性は悲しい声で言う。「あなたに魂さえあったら、あなたがわたしの救済者だったのに。」

悪霊の呪いによって長年長い黒い鎖を両足に引きずっているこの女性を解放するため、どうしたら魂を手に入れられるかをミヒェルは尋ねる。はじめは答えを拒んでいた女性も、おろかな者のひたむきさに、「他人の魂のために死ぬことができるなら、おそらく魂を見つけるだろう」と答える。おろかなミヒェルは死を恐れない。「死ぬなんてひとりではできない。お父さんやお母さんは床について、お医者さんに来てもらう以外、なあんにもしなかった。」

魂のすみかだときいて月を見上げていた幼い日のミヒェル。そんなミヒェルのことを愛しく思って、夢に現れ一緒に遊んだのだと語る女性。その女性に、どうして自分にだけ魂がないのか、それが神の正義なのかとミヒェルは問いかける。(第3巻第3号)

魂の代わりにミヒェルが備えているすばらしいもの——怒り、苦痛、嫉妬、恐怖といった何事にも煩わされないし、自分の姿を見、声を聞くことができる——それが神の贈り物だと女性は気づかせる。「日の昇る方角へ行き、今まで通りのほほんど(bequem)していなさい。おろかなミヒェルとしていつも真っ直ぐ(schnurgerade)進み、いやなこと、不安や怒りのもとになるようなことは一切しない、要するに今のままのおろかなままでいれば、私を解放し、小さな、ほんのちっちゃな魂を手に入れるでしょう」と言って霊の少女の姿はかき消える。

東へ向かってミヒェルは出発する。しばらくは見慣れた土地だが、だんだん荒涼として人気のない未開の地となり、とうとうどこにいるのかわからなくなる。進むにしたがって岩だけが回りにゴロゴロしている。蛇や茨やいらくさを踏みしめ、「小さな魂を手に入れるんだ、ちっちゃな可愛い魂を」と楽しげにつぶやきながら、ミヒェルは真っ直ぐ東へ進む。(第3巻第4号)

水の固まりが奇怪な怪物のように迫る寒い地帯を通り過ぎ、至る所にもう

もうと煙が立ちこめる広大な平地となる。炎や煙が恐ろしい怪物の姿となって迫ってくるが、おろか者のミヒェルは平気で、灼熱をくぐってなおも真っ直ぐ進む。「ありがとう。さっきはたっぷり凍えたから、少しの煙や炎はほんとに気持ちがいい。」

「ミヒェル、いったいおまえはどこへ行くつもりなのだ」との声にミヒェルがゆっくり振り返ると、突然広い広い砂漠の中にいる。彼の背後には黒づくめの服を身にまとい、鋼鉄の馬にまたがり、血のように赤いマントを羽織った男が立っている。

「俺の旅も魂の女王の城へと向かっている。おまえを連れて行って、おまえによりどりみどりで魂を工面してやろう。おまえが俺に一つ好意を示してくれたら。」

「魂が欲しいなら、たっぷり支払わないといけない。あの魔法の城の扉を開けてくれさえすれば、金も力も手に入り、それで千の魂も手にはいる。」  
(第3巻第5号)

その扉は赤マントの騎士自身が作ったものだが、魔法をかけられ、子供の手でしか開かなくなっている。騎士は言うことを聞かなければ死ぬことになるぞとミヒェルを脅すが、死ねば魂が手に入るミヒェルにはかえって逆効果となる。騎士は強大な霊の領袖で、「生の享樂」(Lebensgenoss[sic.])と名乗る。ミヒェルが通ってきた土地もかつては人間が住んでいたが、この赤マントに征服され、あんなふうになってしまったのだった。赤マントは幸運を授けて人類を征服し、すべてを砂漠に変えてしまうことを計画している。

ミヒェルと赤マントは馬に乗る。やがて砂漠の真ん中に金色の屋根を持つたいそう美しい大理石の宮殿が出現する。さまざまな宝石で飾った門には、大きな金色の文字で「高潔」(Ehrenhaftigkeit)と書いてある。ここは高潔な魂の居城で、自らの帝国拡大のため、赤マントはここからいくつか魂を持っていこうと考えている。

ところが、馬に乗るのが愉快でたまらないミヒェルは、降りて門を開けよとの命令を拒否し、鋼鉄の馬に鋼鉄のむちをくれる。

しばらくすると、先ほどのほど大きくも立派でもない城に到着する。門には青色で「慎み深さ」(Sittsamkeit)と読める。ミヒェルはまたしても下馬を拒む。

またしばらく行くと、全体が緑の蔦でおおわれ、どこことって見栄えのし

ない城に到着する。城には茶色に塗られた門扉を備えた小さな門があり、ミヒェルは門に白い小さな字で「美」(Schönheit)とあるのを読む。

赤マントの騎士は、今までの高圧的態度を改め、どうかここで降りて錠前をあけてくれるよう懇願する。するとミヒェルは、「頼まれたことをするのは好きなんだ」とあっさり承知する。ただし赤マントが開けてほしいのは裏口。(第3巻第6号)

どうして裏からなのかを尋ねるミヒェルに、「前の扉は正真正銘の迷路になっているから、俺自身が完全に気が狂ってしまうだろう」と赤マントは答える。「裏からこっそりはいやだ。何だって真っ直ぐしなくちゃいけないんだ」とミヒェルは拒否する。すると赤マントはミヒェルをたぶらかすために妖術を使い、ミヒェルのまわりに金貨銀貨の雨を降らせる。「これを持って帰れば村いちばんの金持ちになって、好きなだけの魂が買えるぞ。」しかしミヒェルは、「パン屋でパンを買うようなのはいやだ。そんな売り物の魂なんかほしくない」と、富による誘惑をしりぞける。

赤マントがもう一度合図すると、金髪の上に光り輝く王冠を載せた若くて美しい王女を先頭に、ピロードや絹を身にまとった紳士淑女の一行が現れる。「彼女は大きな国の王女で、おまえの後となり、おまえを王様にしてくれる」と赤マントはささやく。ミヒェルは王女の魂が厚化粧をした魂だと見抜き、誘惑に乗らない。

魔法のまやかしはあっという間に崩壊し、赤マントは悪態をついて激昂する。

「おまえはいちばん美しい魂を俺の鎖から解き放った。その美という魂は俺に仕えて、人間の中にある名誉、道徳、良心といったすべてを、美を所有したいという欲望によって崩壊させることになっていたんだ。」

気を狂わせてやるとの呪いの言葉とともに赤マントは姿を消す。ミヒェルは目に見えない荒々しい霊が、手足を引きちぎるのを感じ、死を実感する。やがてもう何も目や耳に入らなくなる。(第3巻第8号：VWnO版はここまで)

かなりの時間がたってようやく意識を回復したミヒェルは、自分を抱き起こそうとしている白い少女の姿を目の前に見る。それが死の姿と勘違いしたミヒェルは、ほほえみながら目を閉じ、「こうして彼女が救われ、自分は小

さなさやかな魂を手に入れるのだ」との感慨に、思わず熱い涙を流すが、徐々に正気を取り戻す。彼女に再会し、しかも鎖のない姿を見て、ミヒエルは生まれてはじめて喜ぶ。霊の女性が事細かにミヒエルの家の様子を話すので、里心のついたミヒエルは、「死んだミヒエルがもう一度故郷の家を見ることができるのか」と尋ねる。すると女性はミヒエルがまだ生きていることを告げる。(第3巻第9号)

「あなたに約束した小さな、ちっちゃな魂とは私のことなの。ただお母さんが承知しないから、あなたが私を手に入れることは金輪際できないのです。」「じゃあ僕を手元に置いてください。」「生きている人は一分たりとも気が狂わずにはお母さんの魔法のお城にとどまることはできません。」「じゃあここで死を待つ。」「自分から進んで死んだ人は、お母さんの魔法のお城に入ることはできないのです。』

母親が娘の軽はずみな約束を容認しない理由は、最愛の娘がミヒエルとの結婚で不死性を失い、赤マントの支配下にある人間世界で、ミヒエルの妻としてあらゆる辛酸をなめるから。「美」の城でいちばん美しい魂であるわが娘の軽はずみな約束に対する罰として、女王は一番奥の部屋に娘を監禁する。一方ミヒエルに対して女王は、故郷の村に帰り、そこで王となって、悪者の赤マントのたくらみに対抗するよう決める。(第3巻第10号)

女王は娘に対しても、ミヒエルに対しても正しい決定をしたのだ。娘の美という資質が赤マントに苦しめられている人間世界では、かえって大いなる不幸の源になる可能性があり、また、魂がないというミヒエルの資質が偉大なすばらしい王になるための資質でもあるからである。

眼に涙をためて、霊の少女はミヒエルに別れを告げる。「あなたは何千という魂を、あたかもあなたがちょうど同じだけの魂を持っているかのように治め、偉大な有名な王になることでしょう。」「そんな交換はいやだ」とミヒエルは頭を振り、少女を抱きしめて、ともに母親に逆らおうと言うが、少女の姿はかき消え、ミヒエル一人が城の前に取り残される。

突然城が恐ろしいまでに巨大化する。しかし、門は以前と同様小さいまま。開こうとしない扉をようやくこじ開け、歓声を上げて城の中に駆け込むミヒエルを、金棒を持った二人の恐ろしい巨人が待ち受ける。(第3巻第11号)

ミヒエルの死を恐れぬ毅然たる態度に、やがて巨人はなすすべもなく消え去る。柱廊をめぐる果てしなく広い広間がミヒエルを迎え入れるが、

ようやくその端の扉にたどり着いて開けると、また同じような広間が現れる。その無限の繰り返し。常人なら狂気に陥るような孤独の中で、ミヒエルは「僕の小さな善良な魂を手に入れる」というおろか者の一徹な思いと、扉を開けるたびに彼女がいるのではないかとの不屈の希望で、倦むことなく進み続ける。

とうとうとある戸口に顔をヴェールで深く隠した大女が石像のように座っているのを見る。歓声を上げてミヒエルは近づき、どこに自分の小さな善良な魂が閉じこめられているのかを聞くが、その巨大な老婆は、骨の髄をふるわすような声で、「頭で思っただけで、おまえはふるさとに戻れるのだ。王冠で満足しろ。これ以上一步でも進んだら、ヴェールを持ち上げるぞ。私は狂気なのだ。」と言う。(第4巻1号)

押し問答の後、その巨大な老婆はヴェールをあげ、狂気の顔を見せる。やせこけた長い指でミヒエルの腕をつかみ、恐ろしいメドゥーサのまなざしでミヒエルを凝視するが、ミヒエルは平気で、狂気の巨大な姿を力強く一気に振り払う。

突然広間の壁が澄んだ水晶でできているようにミヒエルには思われ、遙か彼方の部屋に少女がいて、自分の方に腕を伸ばし合図しているのが見える。しかしそれはほんの一瞬のことで、灰色の霧が彼の眼前に立ちふさがり、小さな魂の姿を隠す。猪突猛進するミヒエルに霧のカーテンは黒いカーテンの掛かった扉に変身する。

そのかまちは黒いヴェールをかぶった女性が、黒い大理石から刻み出されたように座っている。骨と皮にまでガリガリに痩せている。「私が誰だかわかる？ 私の名前は疑い。」「おまえは彼女がどこに閉じこめられているか知っている。おまえはそこまで私を背中に担いで行かなきゃならない。私とその部屋の鍵を開けるために。いいかい、もし私を担げなかったときは、おまえは彼女を連れずに故郷の村へ帰って、村長の下僕に戻るのだ。」

軽くて華奢に見えた老婆は、担ぐと恐ろしく重くなる。「王冠か百姓女の愛か」と再考を促す老婆。聞き入れずますます重くなる老婆を担いでミヒエルは進む。「もはや彼女は不死ではない。そんな女なら王になれば人間の世界でも見つかる」と老婆はなおも説得を試みる。(第4巻第2号)

何とか戸口にたどり着くと老婆の姿は消え、永遠の美の煌々たる輝きに包まれ、この魔法の城の女王が現れる。

「せめてもの慰めは、おまえが娘と娘に持たせてやる物にふさわしいことで、娘はおまえの腕の中で、赤マントの鉤づめから安全に暮らすことができます。ミヒェル、後ろを見なさい。そのためにおまえがあんなに力強く戦った娘はおまえの後ろに立っています。」

振り返ると広間は自然の季節の移り変わりをミヒェルの眼前に展開する。そのあまりのすばらしさにミヒェルは泣き出す。白い衣装を全身に纏い、金髪の上に輝く黄金の王冠を載せたすばらしく美しい女性が、彼の腕に身をゆだねる。「これであなたは、あなたの小さな、ちっぽけな魂を手に入れました。... でも私のためにいつまでも愚かなままでいてください。」(第4巻第3号)

行方しれずのミヒェルがよそ者の妻を連れ帰ったとの噂が、村中に広がる。ミヒェルの妻の評判は芳しくない。「小柄で弱々しげな人で、仕事には全く不向き。大きな青い目以外にこれと言って際だったところがない。」村長は立腹し、将来の村の負担を心配する。村人の悪評にもかかわらず、ミヒェル一家は平和に幸せに暮らす。着の身着のままに村にやってきた無一物の女が、男の子、それも金の巻き毛の本物の王子を産んでも、彼らが村人の重荷になることはなかった。村人はミヒェルの妻が誰なのか、霊たちとの激しい戦いでミヒェルが何者となったのか知らなかったし、半ば崩れ落ちていたミヒェルの小さな家がどうなったかも知らなかった。

ミヒェル一家は目には見えない嫁入り道具<sup>9)</sup>のおかげもあって、ますます豊かになったのだが、そのことには赤マントに苦しめられている村人は気づかなかった。ミヒェル一家は村人には単に貧しいミヒェルで、それゆえさげすまれ、疎んじられていたからである。ミヒェルは村の仲間内では相変わらずおろかな魂なしミヒェル、彼の美しいお妃は月並みの貧乏女と呼ばれており、二人はさげすまれ、忘れ去られて小さな家で暮らしている。ひょっとしたらまだ今このときに至るまで。(第4巻第4号)

### III VWnS 版と ZfDS 版との異同

VWnO 版と ZfDS 版との間には、その発表時期に約 10 年の隔たりがある。ストーリーの大筋はどちらにも共通しているが、表現、内容が全く同一という訳ではない。以下において、VWnO 版と ZfDS 版との異同について述べ

たい。個々の表現上の相違に至るまで網羅的に取り上げることはせず、主だった内容上の異同のみを、整理して箇条書きにして示す。

すでに述べたように、VWnO 版は ZfDS 版の前半部分しかなく、当然のことながら比較できるのも、この部分に限られる。

### 副題

VWnO 版には、作品名の下に「メルヒェン形式における人生観」(Ein Lebensbild in Märchenform)という副題が掲げられている。この副題があることで、メルヒェンに仮託して自らの人生観を語るという、作者次郎の『おろかなミヒェル』創作の意図はより明確に伝わる。

### 冒頭部分

VWnO 版の書き出しは、ZfDS 版とは大きく異なっている。比較のため以下に訳出する。

デュンメルハウゼン村がどこにあるか、もしかしたらご存じでしょうか。私は知りませんが、どうしてこの村がデュンメルハウゼンという名前なのかは知っています。というのも、そこに住んでいる人たちは、なるほど働き者の農夫なのですが、みんな揃いも揃って鈍い頭(中身も外側も)の持ち主だからです。彼らが仲間内で「われわれと世間」と言う時は、いつだって自分たちは賢い方の半分だと考えていたのですが、その無知蒙昧ぶりはかなりのものでした。

上記からもわかるように、Dümmelhausen には「馬鹿者のすみか」の含意がある。ミヒェルの故郷の村がデュンメルハウゼンと明示されていることは、単に部分的な相違にとどまらず、メルヒェン全体を解釈する上で、少なからぬ影響がある。村人が必ずしも賢者ではないことを示す記述は ZfDS 版にも散見されるし、「村」というそもそもの舞台設定そのものが、暗示的に作用はしている。しかし、そのことと「馬鹿者のすみか」と村の名前が明示されることとは、作品全体に対して持つ意味が異なる。ミヒェルという名前が喚起する笑いで始まる ZfDS 版では、読者はミヒェルの「おろかさ」に関して無反省のまま作品に導き入れられるが、VWnO 版では、読者はミヒェ

ルの「おろかさ」をそのまま単純に受け入れる訳にはいかず、作品の副題と合わせ考えるなら、物語の冒頭から作品に込められた作者の「人生観」を強く意識せずにはおれない仕掛けとなっている。

### ミヒェルの前に現れる美しい姿の名前

冬の夜ミヒェルの前に姿を現す女性の幻は、ZfDS 版では夢の中での顔見知りということもあってか、ミヒェルも名前を尋ねないし、自ら名乗ることもない。後になって赤マントの話等から読者はそれが「美」であるとわかる。一方 VWnO 版ではミヒェルと女性は初対面で、ミヒェルの問いに答えて、女性は「愛」と名乗る。ZfDS 版とは異なり、「愛」は地面にかがんで、しきりに捜し物をしている。

「私が探しているのは悩んでいる乙女の涙、寄り辺ない寡婦やみなしごの涙、そして後悔や喜びの涙も。それらの涙で孔のあいた樽を一杯にするの。一滴また一滴と。」

つまり女性は、鎖を引きずっているだけでなく、さらにシーシュポスの苦役を課せられているのであるが、このエピソードがあるために、ミヒェルの魂獲得の動機付け——女性を鎖から解放するために魂を手に入れる——は、VWnO 版では曖昧なままになってしまっている。

### 赤マントの正体

VWnO 版では赤マントは名乗らないし、自らの世界征服の野望について語ることもない。したがって、「いちばん美しい魂」をめぐる、ミヒェルと赤マントがなぜ競合関係になるのか、不明のまま終わる。

ミヒェルと赤マントが鋼鉄の馬に乗ってたどり着く先は、VWnO 版では、順に、真っ黒な巨大な巖→やや小さい岩→小さい黒い石、となっている。赤マントの依頼も扉を開けるのではなく、石にある鍵穴に鍵を入れ、石を持ち上げることで、それを拒絶するミヒェルの理由も異なっている。ミヒェルは2度赤マントの計略にはまりそうになるが、石の中から、か細い嘆きの声が漏れるのを聞き、危うく思いとどまる。また、ミヒェルに何とか言うことを聞かせようと、赤マントが駆使する懐柔策の描写は、VWnO 版の方が詳し

く、その内容も若干異なっている。

#### IV おわりに

余技として創作活動にいそしんでいたにすぎない北尾次郎の文学作品を、職業作家のそれと同列に扱うことができないのはもちろんであるが、次郎の場合、他の文学愛好者とも異なる特殊な事情が、さらに加わる。ドイツ語でのみ創作した次郎の作品発表の場は、もっぱら日本で刊行されたドイツ語雑誌に限られていたのである。次郎の作家活動を知っていた近い人々には文学趣味がなかったり、かといって一般の読者が文学的興味でドイツ語雑誌を読むことも考えられず、日本の文学でもなければ、ドイツの文学でもない次郎の作品が、今まで取り上げられることがなかったのは、当然といえば当然の結果である。

日本人読者を前提にした場合、次郎の作品にとって言葉の問題は大きな障害である。その上さらに別の意味での困難な側面もそこにはある。公的研究活動においても、次郎は生涯書き言葉としてドイツ語を使用し続けた。しかし、次郎にとってドイツ語は母国語ではなかった。彫琢にあまり意を用いなかったことにもよるのだろうが、次郎のドイツ語には時としてとんでもない間違いがある。今まで全く言及しなかったが、『おろかなミヒェル』のドイツ語も完璧とは言い難い。とりわけ間違いが目につくのは、ZfDS 版の最終回である。本来ならば、テキストの校訂、確定作業が、まず先行すべきであろう。

ドイツ語の問題だけではなく、次郎の作品構成の力量もやはり問われるべきであろう。小さな内容上の齟齬——例えば、VWnO 版では孤児となったミヒェルの雇われ先に関して矛盾がある——を考慮しないとしても、全体として『おろかなミヒェル』を成功した作品とみなすことは難しい。ZfDS 版最終回は作品の大団円としてはあまりにお粗末である。赤マントの人間支配も、ミヒェルと村人との関係も、何一つ変わらないままの結末に、構成上の破綻を見ることはたやすい。次郎の作家としての限界を顧慮することなく、その作品にかかわることはできないのである。

次郎の作品をめぐるこれらさまざまな問題点を承知の上で、今回敢えて『おろかなミヒェル』を取り上げた。北尾次郎が、忘れ去られたままにいる

にはあまりにも惜しい、魅力的な人物だと考えるからである。もっとも次郎自身は世間の無知、無理解を超越した存在だった。そのことは『おろかなミヒェル』の内容からも再確認できる。魂探索の旅の果てに、伴侶として美しい魂を伴って帰郷したミヒェルは、以前と同様村人には「さげすまれ、忘れ去られて」暮らすのである。作品構成上強引な印象を否めないそのような結末で『おろかなミヒェル』を締めくくったのは、おそらくそれが次郎の考える幸せな結末だったからであろう。忘れ去られたままでいることが次郎にとって幸せな結末なら、本稿はさしずめその結末を乱す無用のお節介ということになるのかもしれない。しかしながら、筆者がどうしても伝えずにはおれなかったのは、そのように考える次郎の魅力そのものなのである。

### 註

1) たとえば、上村直己『「独逸講文会」について—ドイツ文学移入史の一齣』、『日本古書通信』第664号（昭和59年11月号）、4ページ（若林一弘氏のご教示による）、あるいは、小堀桂一郎『西学東漸の門—森鷗外研究—』、朝日出版社（昭和51年10月）、142ページ（古郡康人氏のご教示による）参照。

2) この論文の一部分は、小堀桂一郎「森鷗外とカール・フローレンツ—古い雑誌から—」、『森鷗外全集月報 35』、岩波書店（昭和50年1月）、11—12ページで活字化されたことがあったが、全文発見は今回が初めてである。1995年（平成7年）9月20日朝日新聞（夕刊）「鷗外 “幻の論文” を発掘」の記事を参照のこと。

3) 第2号、第3号の巻末に、アルファベット順の「独逸文雑誌会 全会員一覧」がある。筆者の所持しているコピーは不鮮明で判別できないが、現物を実見した若林氏によれば、「活動会員」の欄に変更はないとのことである。

4) 原語は »Gesang des Chariten«, Chariten を Charis(カリス、ギリシア神話の美と優雅の女神) の複数形と考えるなら、定冠詞が間違っている。また、実際の詩の内容とも一致しない。Charit なる男性弱変化名詞が想定されていると仮に考えておく。ちなみにこれは第1号からの連載ものであることが、Aus dem Wanderbuch eines Taugenichts (Wanderbuch も奇妙な

単語であるが、一応「のらくら者の旅の本から」と訳す) という末尾に添えられたカッコ書きによってわかる。「匿名」の作者が次郎である可能性が大いに考えられる。

5) 鷗外主宰の『文学評論 しがらみ草紙』の創刊号(明治22年10月)裏表紙に、『独逸文雑誌一名東漸新誌』第9号の広告があり、「決闘論」の著者森林太郎と並んで、「小説吾妻」の作者として北尾次郎の名前がある。(古郡康人氏、上村直己氏のご教示による。)

6) 西脇・猿田・若林「知られざる北尾次郎」、『山陰地域研究 伝統文化』No.5 (1989, Mar.) 73 ページ参照。

7) 西脇宏「北尾次郎『森の妖精』—翻刻(2の4)」、『島根大学法文学部紀要 文学科編』第20号—II (1993年12月)、139 ページ参照。

8) カッコ内は『独逸語学雑誌』の巻号数を表す。以下同じ。

9) 嫁入り道具の具体的中身は、原文では、dich Tischlein となっているが、これはグリムの『童話集』第36話に出てくる Tischleindeckdich (「用意しろ」と唱えるだけで食べ物が出てくる魔法のテーブル) のことであろう。「目には見えない」というのも次郎の勘違いだと思われる。Cf. »Kinder- und Hausmärchen, gesammelt durch die Brüder Grimm«, Bibliothek deutscher Klassiker 5, Frankfurt a. M., 1985, S.168ff.